浪だつ大海より歳は生じたり、昼夜を配分し、一切の瞬くものを支配する。

｛注：リグ・ベーダ賛歌（辻直四郎訳1970）より。歳は時間、瞬くものは生物｝

詩集　瞬き

2021-3-27現在　順次増補予定

　野帳の片隅に、厳しい旅の合間のそよ風であった一瞬の想い、書きとめたはずのメモを順次繰って、寡作で拙い詩を探し出して、録しておく。しかし、読み返してみると、赤面するしかない青春もあったようだが、今さら隠すようなことでもない。それなりに、大人に成長したと思うからだ。

ｐ41.　転生輪廻の安息　　2021.2.9

春眠の羽毛の中に
口から吐く息を
鼻から吸うと
人間の匂いがする
この阿修羅も老いたのだろう

いずれ輪廻の道から外れて
野の草花になり
安息の静寂に暫し休もう

また何時か転生
幼い阿修羅に

ｐ40.　野川の散歩にて　　2020.8.8

翡鳥如嚆矢　其遡上川面　早急払冠疫　善者与幸福

翡翠は光矢の如く、川面を遡上し、善なる者に幸いを届けよ

ｐ39.
心の聖堂　　2020.5.6

ステンドグラスを透過した聖堂の光彩は影と共にある。
心の光は輝き、美しく清んでる。
心の影は奥ゆかしく揺蕩うている。
地下に埋められてきた心の闇には悍ましさ、
もう朽ち果てて消えてしまえ。

全て生き物の文明が新しい地平線のそこまで来ているのだ。
陽光はすでに昇っている。
野の草木の花々も綺麗だ。
生きる幸せの他に余計なものは何もいらない。

安んじて、穏やかに歩んで行こう。

ｐ38.

The couple　　45th　anniversary

笑っている　大きく　ファインダーの先で
風雨をうけて　折り畳み傘はカラフルな茸だ
それでも楽しく笑っている

わがままな振る舞いにも
ほぼ永遠の短い人の生を一緒に過ごし
感情の糸がよじれ　ほつれても
怒りの中にさえ　甘い想いがある

歓びの身も　心の情に添われ
世俗に暮らす理知の衝突も
大らかな知恵が緩和する
身と心の向こうに　片時もある笑み

風雨のロカ岬　母なる海の始まる場所は
花蕾を閉じたマツバギクに被われていた
陽光がさせば　満面の笑みが開き
長き航海の幸福を祝してくれる

ｐ37.　2018

火中栗不拾　而他之栗投　吾之深絶望　誰知高希望　他栗破燃去

ｐ36.　2017-6-15

「こどもかんきょう絵じてん」のはじめに用に作ったが、使用しなかった。そこで、『環境学習原論』の序に入れた。

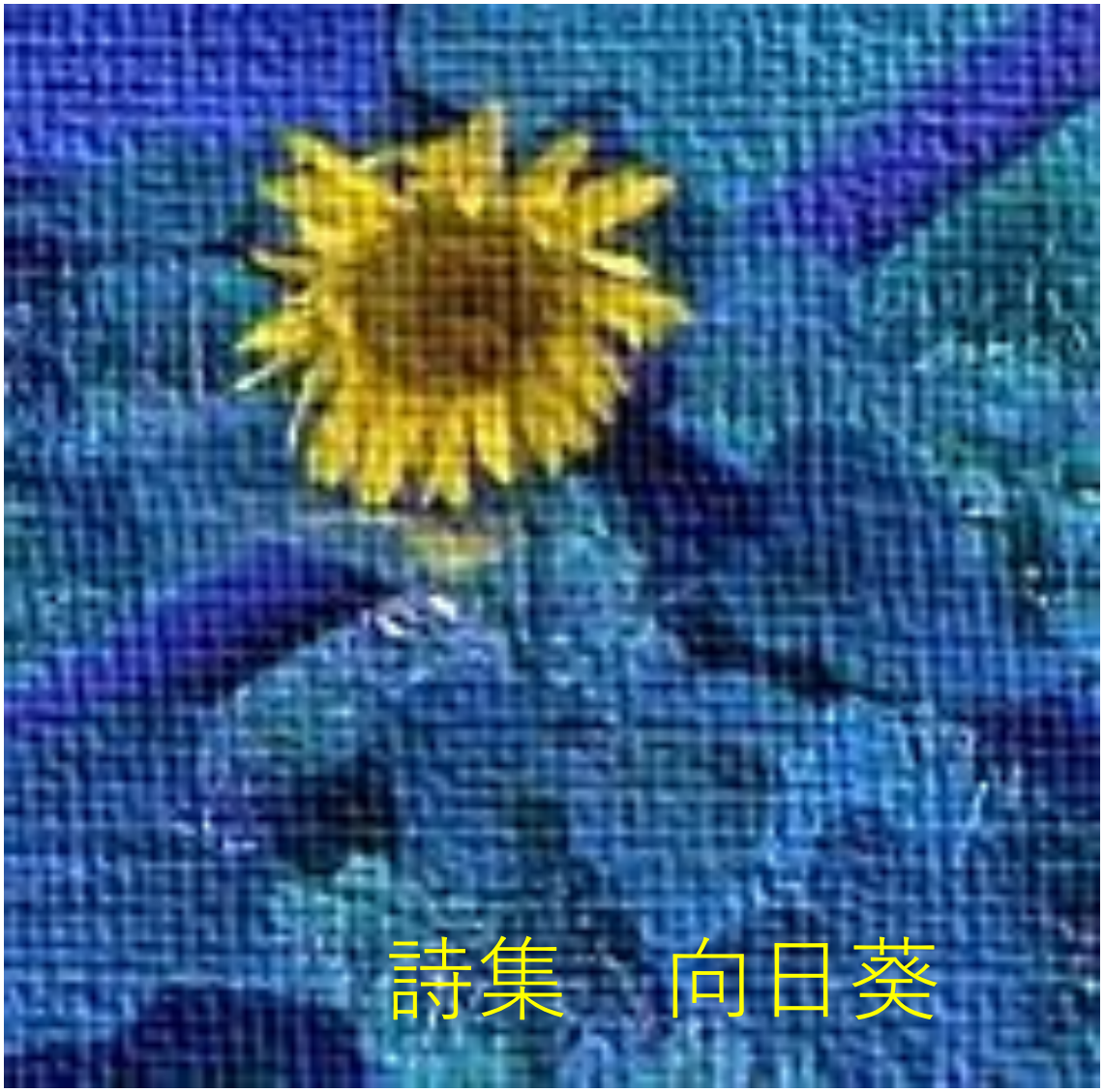
みらいのこどもたち、
まちやむら、やま、かわやうみをたんけんしよう。
きみたちのまわりには
うつくしいはなのいろ、きれいなとりのなきごえ、
ふくかぜやながれるみずのここちよいおと。
ちょっとこわい　ちょうせんだけど　おもしろいぼうけんがたくさんある。

めをみひらき、はなをふくらませ、みみをすまして、
あるいていけば、いちにちじゅうが　たのしい。
かぞくやおとなたちはきみたちを
ちゃんとみまもっているから　スキップして
うたをうたっても　だいじょうぶだよ。

ｐ35.　晩い秋に想う　　（2013-11-6）

季節の移ろいは人を待たない
人は季節をとらえるのだ
生き物のごとく無闇に生きればよい
意図するな ただ季節を暮せばよい
待つな ひたすら進む季節のごとく

早春は雲に覆われ、冷風が吹く。
稀に晴れると、暖かく気持ちも晴れ、
ロビンのさえずりが聞こえる。
　Fizloy Flat 2nd Floor　の窓から、帰国を前に。



青春のころの詩

　今、読むとかなり赤面ものだが、思い出事実として記録しておく。

ｐ1.　1967 年 5 月

その人に

一粒のかわいい種子（たね）を
陽光の夜露とで
いつくしみそだて
香とみつをぬすんではいけない
汚れた口びるを
花びらによせてはいけない

ｐ2.　1967 年 5 月 22 日午前 2 時
公園　　東山公園の真夜中

ばらの香　まつの香　そして　つゆの香
だあれも　真夜中の公園を見たことないでしょう？
冷たい砂場のトンネルの跡　すべり台　ベンチ　だあれもいない
でも　じっと心をすませると　聞こえるんです
ボートの　ブランコの　木々の　花々の声が　聞こえるんです
昼間は知らない顔しているくせに
いまは小さな声で話しているのです
耳をすましてごらんなさい
ミーンと言う声がしませんか？
ささやきですよ
「二人の恋人を乗せて　スイ　スーイ」
「かわいいじょうちゃんを乗せて　ブラン　ブラーン」

ｐ3.　1967 年 7 月 12 日
向日葵

大きな葉を広げ
陽の恵みを無邪気に浴す
あくことを知らない
コロナは朝にはえる
深く　太く　地に根をはり
幼い児は従順に
陽の光を迎える

むくむくと内からふくれる
おしゃべりな入道雲
とびかう赤トンボに
おおらかな面をたれ
生命をはぐくむ
母なるは美しい
しずかにゆれる

ｐ4.　1967 年 7 月 14 日
日

心は
朝　目覚めて友を見る
なぎは二人を　語らしめる
太陽の南中は　恋をつげ
沈む前　それは激しく燃えあがり
そして　そして
月の光が　友の面を清める　静かに
なんと　すばらしい生命ではないか
愛とは

ｐ5.　1967 年 7 月 19 日
農村（むら）

　　暑くなくちゃ稲はみのらん
むくむくわきあがる黒雲は　一面　天（そら）をおおう
百メートルむこうの家は　小森（もり）は水煙（みずけむり）にかすむ
はえそろった稲の若草は　激浪に変じる
しぶきをあげて　波だち　さわぎたち　農道（みち）も
電信棒も押し流す
　　雨は百姓に恵みじゃ
たたきつける雷は人をおびやかし
田の水面の浮草は　波間に落ちる雨滴に浮沈する

赤い自転車は　配達先の軒先にかくれる
はた屋のはたは　カタンコトンの歌を忘れ　窓辺の水しぶきは　心にしみ入る
激浪は　単線の二両電車を　流しさってしまった
小駅（えき）にはだれもいない

ｐ6.　1967 年 5 月 22 日
温室

遠いエジプトから来た　水連と
赤い金魚が話してる
　　青いナイルの幸せ　かわいい池の幸せ
そうして　今　愛し合う幸せ
赤い金魚は　水連にくちづけし　その下で眠る

ｐ7.　19677 月 20 日
軍勢

青天にわきあがる　軍勢は陽の火炎をあびせ
いなづまを発し　雨滴の矢を放つ
氷の弾丸（たま）を　黒雲に乗じては飛びかわす

　　人は恐れおののき　うちしおれ・・・
軍勢は　今は　敗軍となり果てるも　山脈（やまなみ）を黒々と騎馬はかける
背後　山脈の燦然の輝きは　壮絶たる　軍勢の末期（まつご）の戦であった
　　人は唖然とし　感嘆し　そして　　喜び・・・

ｐ8.　1967 年 7 月 20 日
破屋

何時しか破れこぼちた　水辺の屋（おく）
木曽の流れは　重なり　怒涛と押しよせ　没し去った
生死に清められ　栄えた　いつの日か
あじさいのうす紫がにおっている
破れくちた　屋の陰で　ひっそりと

ｐ9.　1967 年 7 月 20 日
水のえくぼ

真白に煙って　落ちる水
静かに流れる　田畑を潤す水
ひっそりと　山脈を映す水
異国の色香をもって　打ち寄せる水

どこに水のえくぼ　あるのでしょう
妖精は水のえくぼを　忘れたのでしょうか

ｐ10.　1967 年 7 月 20 日
いつか女の子は

女の子はいつか　女神になります
美しく　優しく

でも　男の子は女神の虜

ぼくはプリンセスのおそばに　お仕えできれば　幸せです

ｐ11.　1967 年 4 月
恋

彼女は駆け寄り窓を開けた
彼は私を探している
彼は私を愛している

　「誰のことを　言っているのですか」

朝の太陽が　こんなに輝かしかったことは
一度も　これまでなかった

恋こそ人生の激流
君がいなければ　僕は不幸です

L’ amour

Elle courut a la fenetre et l’ouurit.
Il me cherche.
Il m’aime.
“De qui parley-vour? ”
Jamaisle le soleil matinal.
N’anait ete plus brilliant.
L’amour est l’agitation de la vie.

Je serais malheureux sanstoi.

ｐ12.　1967 年 4 月
春嵐

匂やかな交響詩に　水煙が躍る
激しいリズムは雨だれ
やわらかなのは菜の花の香
一粒こぼれて　大きく咲いた黄

P13.　1967 年 7 月
七夕

煙草は　もうもうと立ち込める
卑俗なラジオに　冷いやりとクーラー
鉄の球は　うつろにガチャガチャと
動き回り　音を立てる
片田舎の街
竹に　ナイロンの飾り玉

新聞紙の巨大な張り子
怪獣出現！　ナントカギラスに　ナントカゴン
宇宙ステーションにロケットだ

ｐ14.　1967 年 9 月 4 日
裏切者　　期待に魅入られし者

一杯の麦酒を汲む　裏切者よ
汝　自らを　これにて清めん
勇気を持て　そして
そして　彼の方に従え

一顆のオレンジは　汝の瞳を
再び澄ますであろう
これは許しではない
期待は汝を誘惑するのだ

美しき　素直な少女よ
裏切者の私は　あなたから
去らねばならぬ　お幸せで

裏切りの罪は　血にて償わねば
ならぬ
荒野の真っただ中で
白き屍となって果てるか
芥の巷で　放り捨てられるか

花々の中で安らかに眠ることは
望んではならぬ
汚れた血はそこで流してはならぬ
草花は枯れるに違いない

哀れな汝よ
もはや

汚れた血を流し出さない限り
許されぬ汝
死によってのみ
清められるであろう汝
誘惑に魅入られた弱き者よ
期待は汝の敵ぞ

ドルフィン、小熊、時計

汝に愛は与えられぬ
愛を与えることのみが
血の償いによってのみ与えられよう
もう一度　もう一度だけ
御救いの御手を

ｐ15.　1967 年 10 月 10 日
眠り

眠りはやさしい妖精
一日の疲れを癒してくれる
哀しい夜は
全てを暗闇に溶かしてくれる
　　（ああ　何という同情の心）
新鮮な生命は　朝に注がれよう

眠りはいたずらな妖精
勉強したいのに　遊びたいのに
　　（一日はたった 24 時間しかないんだ）
眠りの魅力には　誰もが
虜になってしまった

ああ　眠り　ネムリ　ねむり
おやすみなさい　かわいい妖精

ｐ16.　1967 年 10 月 16 日

宮殿の影

みんなが信じないくらい
ロマンティックな夜です

月は木々の間に　家々の間に
見え隠れします

濁りの川も
夜は流れだけを残して
すべて消えます

草ぐさの中ではコオロギが
恋を雄弁に語り合っています

それが山崩したばかりの　狭い
石膏の土地でも
積み上げられた木材の
影であっても
夜は素晴らしい
大理石の宮殿です

美しい王女様　きっと
なんと清いお声　お一人で
宮殿のバルコニーに立っておられる

みずぼらしい兵士の私は　遠くから
あなた様をお守りしながら　お声を
　　（畏れ多いことです）
お声を　お聞かせいただきましょう

月はもう　おやすみなさい
ビルの向こうの山に

ｐ17.　1967 年 10 月 16 日

雨に濡れて

雨に打たれて　この身のすべてを
洗い流そう　すべてを
バイオレットの小さな花も
棘の繊細な　あの赤いバラの花も
この流れに　川の流れに
海に流してしまおう
それは再び浮かぶことなく
深く沈みゆくことだろう

だけど
雨の泉は　根まで流せようか
広く張り巡った根まで
根があれば　また　来年
その後も　花は咲く

また辛い思いが
流れに蘇ろう

ｐ18.　1967 年 10 月 16 日
彼女に

謙虚に　心から
人生に　頬に
彼女に口づけします
いつか
激しく抱きしめることもあるでしょう
彼女　人生を
あなたを愛します　心から

ｐ19.　1967 年 10 月 21 日
小さなクエスチョンマーク

ただ好きなだけ　他に何がいるの
　　黙って！　静かに
それは　そっと　しておいてください
川に月は流しておけば　いいんです
草の中でコオロギは　鳴かせておけばいいんです
木の葉は紅く　黄く
落ち　どこかへ去ります
風が　木枯らしが
君の心もその様ですね
それは　そっと　しておきましょう
波立たせは　しますまい　石を投げて
春になれば　また　芽も出ましょう
ただ　好きなだけなんです

ｐ20.
Hold my peace

I will hold my peace.
Will swear to love you with open arms,
As long as I live.
Shall never forget the day
When met you for the first time.
I expressed my hearty wishes
For your happiness.

ｐ21.　1967 年 11 月 20 日
ひみつ

私は（何も）言うまい
心から貴女を愛すると　誓おう
生を受く限り
その日を忘れはしまい　決して
貴女に初めて会った日を
幸せは　貴女に　心から

ｐ22.　1967 年 10 月 24 日
あい　あむ　あ　えっくす

ぼくは天才なの
気狂いとの間を
去来する天才なの

ぼくは寂しさなの
君にはわからない
寂しさという名の　さあ？
人なの　人間なの？
それとも
何なの

ｐ23.　1968 年 2 月 19 日朝
誕生　　18 歳の君に

君が生まれし時
早春の兆しは
老いたる木枯らしと伴に
ゆりかごの辺りに集ひ
暖かき言葉にて
かの少女の明日を
祝福しき

君が微笑みし時
春陽の光は
庭池の薄氷の反射に
産屋の内に入りし
快き律動にて
彼ら母子の今日を
祝福しき

ｐ24.　1968 年 2 月 17 日
美心
我待静天命　後従美君心
男児得大志　奉其愛友恩

美しき心
我静かに天命を待つ　後に美しき君が心に従ふ
男児大志を得て　それ愛友の恩に捧げん

ｐ25.　1968 年 5 月 26 日
ひる

海　灰白色の
黒い　砂
白いズボンと紅いセーター
手と　手をつないで　輪を描き
走ろう　むこうの渚まで

ｐ26.　1968 年 8 月 15 日
よる

真夜中　海に行く
一人で　何か　いい気持ちだ
真っ暗で
白い波　打ち寄せる音　太平洋だもの
強そうでいいなあ

ｐ27.　1968 年 6 月 16 日夕
ブランコ

女の子はあじさいの花でした
ぼくは遊園地を歩いていました

雨がサーッと降ってました
右をふと見たら
濃い紫が上に下にスースーと飛んでいるのです

雨に映えたその紫は
誰もいない遊園地で一人楽しそうでした
近づいてみると
小さな女の子が傘も持たずに
ブランコに乗っているのでした
ぼくは傘をさしかけて　聞きました
「君　一人？」「・・・・・」
「お母さんは？」「・・・・・」
「友達いないの？」「・・・・・」
「お家帰った方がいいよ　もう夕方　濡れると風邪引くよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

女の子は何も言いませんでした
ブランコをこぎながら
ただ　微笑んでいるばかりでした
ぼくは来た道に戻りました
心残りに後ろを振り向くと
女の子はもういませんでした
女の子はあじさいの花でした

ｐ28.　1968 年 8 月 26 日
ゆううつ

あめ　夜のセンチメンタル
美　ブドウの葉緑素
あこがれ　心のオルゴール
海　少年の想い出
孤独　ぼくの強がり

ｐ29.　1968 年 9 月 1 日　　夏休み最後の日曜日
海の歌

歩く　歩く　遥続く波
嵐一過　青い大空に
海辺　薪の山
トットトト　トトトットト
入道雲を　吹き上げられない
海原に　浮かぶ幾多の小船
漂流の大木が　ゴロリゴロリ
波をめざして進水
小さな女の子　三人
ばんざあーい

ｐ30.　1968 年 9 月 25 日朝
所在

「青春とは？」

そんな感傷的な問いは　もう捨てよう
ぼくらは　青春を確かに　生きているんだ

ぼくらの足元　そこに青春が　確かに
確かにあるんだ

「青春とは？」

彼はきっぱりと言う
「青春とは俺のことだ」

力強い足取りで　歩いている
ぼくらも　歩いている
想いに向かって　戸惑いながらも　歩いている

「精一杯生きることだ」

ｐ31.　1968 年 12 月 25 日
海の歌　　Some songs of sea

　　序章
海は生命を育み
生命の歴史を　見守ってきた　優しく

　　時に
恐ろしいまでも美しい
多くの歌を
日々　新しい　生命たちのために
歌ってきた
　　聞こえる

ｐ32.
前略　台風　大丈夫ですか？
夜明かしの朝

ただ　寂しいだけです
君は言いました
黙って耐えてみるの　そういう時は
ぼくは黙って耐えています
君を信じて

沈黙の L は　より深いもの
嵐の夜　勇壮な太平洋
太平洋に　押し寄せる　あの激浪に
恐れを感じます　素直に

でも　ぼくは海岸に　明日の朝
きっと立っています
太平洋のようになるんだと　叫んでいます

いつかぼくが太平洋になったとき　ぼくは今度
銀河になるんだと

ｐ33.　1970 年 5 月 2 日 a.m.10：18
全てへの終章

早く
死を実行せよ
苦痛は少ない
恐れるな！
　　この世にまだ忘れ物があるのか？
生きた　愛した
そして今ここにいる
何も言うことはない
ただ

虚無へ！